

イラストレーター

## 南伸坊氏

PROFILE 1947年、東京都世田谷区生まれ。都立工芸高等学校卒業後、美学校に入学し、赤瀬川原平氏らに学ぶ。1972年に出版社・青林堂入社。雑誌「ガロ」の編集長を務め、イラストレーターの渡辺和博氏とともに「面白主義」を打ち出して同誌の傾向を変える。1976年フリーに。イラストのほかエッセイなどを執筆。その独特の文体で嵐山光三郎氏などとともに「昭和軽薄体」として人気を博す。あたたかみのある描線の似顔絵や、シンプルで洗練された装幀が高く評価される。第29回講談社出版文化賞ブックデザイン賞受賞。『ハリガミ考現学』での貼り紙の研究により、赤瀬川原平氏が提唱した路上観察学会にも参加。著書は多数。ゲームソフト「MOTHER」(任天堂)のキャラクターデザインも手がけている。



## 一枚の貼り紙にも「面白さ」を見出し、世の中をもっと愉快地、もっと元気に。

### 印刷物には、ときには原画をも超える表現力がある

**編** 南さんの自画像は、ご著書の中にもたびたび登場するので、とても馴染み深いものがあります。三角おむすびに目鼻を付け、頭は丸刈り。あの独特のアナログなタッチから、ほのぼのとした穏やかな気持ちが伝わってきます。実際お会いするのは今回が初めてなんですけど、本当に自画像どおりですね(笑)。初対面ではないような気がして、何だか緊張感が和らぎました。

**南** そうですか、それはどうもありがとうございます。ほのぼののって、画材も関係するかもしれませんね。以前は太いマジックで普通紙に描いていたんですが、最近は、少しグレー掛かった厚手のトレペに鉛筆で輪郭線を描いておいて、裏から彩色するという描き方が多いです。

**編** それで、より柔らかく、何となくノスタルジックな印象を受けるのかもしれませんが、しかし、トレペを通した間接的な色調を再現するのは、印刷現場にとっては、ちょっと厄介かもしれませんね。

**南** 私はコンピューターをいじれませんから、イラストをデジタル化せず、手描き原稿のまま出版社や印刷会社にお渡ししているんです。裏から彩色してるんで、トレペの地色の薄い

グレーが発色に影響してしまう。きっと、印刷オペレーターの方は苦心されていると思います。

**編** スキャニングにしても刷版にしても、かなり神経を使うでしょうね。

**南** そうした調整がうまくいかないと、イラストの色が濁ってしまったり、全体のバランスが崩れてしまったりするわけです。いまの時代は、イラストもデジタル処理でデータ化され、その数値に沿って印刷されることがほとんどですが、ひと昔前は、印刷現場に熟練の職人さんがおられて、その人に頼めば、最後は何とかしてくれる、というようなことがありました。

**編** 印刷工程に変動要因が多かったアナログ時代ならではの「腕の見せ所」というのは、確かにありましたね。経験値ではなくデータに忠実に数値に忠実に、というのがフルデジタル時代の大きな流れでしょう。

**南** 単に「原画を忠実に複製する」ということだけでなく、印刷には、印刷ならではの美しさがあると思うんですよ。実際、何度も経験していることですが、自分の原画よりも印刷物の方がいいなど感じることもあるんです。原画にはなかった雰囲気、印刷で表現されていて。

**編** 「忠実さ」だけでは括れない、グラフィックアーツの「アーツ」の部分なんじゃないかな。南さんのような、独特なタッチのイラストの「雰囲気」を、印刷で損なわずに再現するのは、

アナログ時代・デジタル時代に関わらず難しいことだとは思いますが、この「ほのぼのタッチ」は、やはりどなたかから影響を受けたものなのですか？

南 あんまりタッチには表れてないですが、私が影響を受けた人はいます。中学生の頃に貸本で読んだ水木しげるさんの『河童の三平』。三平を描く水木さんの線が素晴らしかった。それから、つげ義春さん。大学受験の頃に読んだ『李さん一家』には、最高に不思議な面白さがありました。いちばん直接的な影響を受けたのは和田誠さん。『河童の三平』と同じく、やっぱり中学生の頃、週刊誌の広告を見て「いいなあ」と思って。どのイラストレーションも大好きでした。当時の和田さんは、ポスターや広告のお仕事の中で次々と、新しいスタイル、さまざまな描き方に挑戦されていて、それがみんなとってもイーンです。

### 聖徳太子の御告げで生まれた『本人術』

編 その3人の巨匠の影響を受けながら、南さんは南さんの感性を活かしオリジナルのタッチを身に付け、ついには、巨匠たちも真似のできない(笑)、ご自分の顔をメイクして他人になりきるという、とんでもない技法を開発し、イラストレーションの新しい世界を切り拓きました。その名は『本人術』。真似をする相手は、過去の偉人から政治家、芸能人、スポーツ選手、ニュースに登場したお騒がせな人たちなど、何でもあり。まるで当人が憑依したかのようにメイクアップで変身し、もともとは似ていないのに似ているように見えてしまう、まさに、世にも不思議な芸術です。そもそもなぜこのような手法を思いつき、挑戦してみようという気になったのですか？

南 きっかけは、単なるいたずらだったんです。もうずいぶん

前の話なんですけど、何の気なしに、家の玄関にあった女のコの熊のぬいぐるみのスカートで頭に被って、長い靴べらを持って鏡を見たら、あれ？聖徳太子に似ているなど。妻を大声で呼ぶと『おっ、聖徳太子!』って面白がってくれた。それが本人術の始まりです。30年以上も前のことだから、芸歴はけっこう長いんです(笑)。

編 夫唱婦随ですね。そこで奥様が「あんた何やってんの?」とシラケていたら、本人術の発明もなかった。あるいは遅れていたか。その後はどんな経過を辿って現在の「本人術」になってきたのでしょうか。

南 初めはまだ、何となく物まねをしていたぐらいですね。たとえば、妻や友人たちと、彫刻の森美術館とかに行けば、野外彫刻を見ながら、目の前の作品をまねてポーズをとったり、それを写真に撮ってもらったり。具象彫刻の場合は比較的簡単ですけど、抽象彫刻は難しい。そこをムリヤリ真似するのが面白



本人伝説 (文藝春秋 / 2012年)

#### ■『本人伝説』より



タモリ



アラキー



小保方晴子

い(笑)。旅先のホテルのプールで泳ぎながら、大きな葉っぱを見つけて、頭に乗せて河童の真似をする。同行した友だち夫妻にウケると嬉しい。物まねそのものが好きというより、その様子を周りの人たちが面白がってくれるのが嬉しい。人を笑わせるのが、子供の頃から大好きでした。

**編** 彫刻や河童ではなく、「本人術」として“具体的な人物になりきる”というスタイルは、どのように定着していったのですか？

**南** 友人が編集長をしている旅行雑誌の連載を頼まれたんですが、観光地を普通に紹介するだけじゃ芸がないので、物真似はどうだろうかと思いつきました。会津を紹介するときは『小原庄助さん』になり、神奈川の足柄では『金太郎』に、静岡の清水では『次郎長親分』に、という具合に、その土地のゆかりの人物になりきって観光地を紹介していったんです。それが、仕事としての『本人術』の始まりでした。

**編** 奥様がカメラマンをされていますね。

**南** はい。ふつうならプロのカメラマンが撮影するんですが、やっていることがあまりにばかばかしいので(笑)、真面目なカメラマンの方が来られちゃったりしたら申し訳ないじゃないですか。で、冗談の通じる妻に写真も撮ってもらおうということになったんです。何度か撮影しているうちにどんどんカメラマンとして成長して、いつのまにか関係が逆転して『清水次郎長』のときなんかは、撮りながら『お茶畑の前で三度笠を、こう、パッと放り上げて～!』なんて指示されちゃう。だんだん、ディレクターみたいになって、いまでは、僕の意見が却下されたりします(笑)。

## 一笑に付すものの中に 「真面目な滑稽」が潜んでいる

**編** 奥様は、南さんがお若いときに通われた「美学校」の同級

生だったとお聞きしています。資料を拝見すると、その美学校は、現代思潮社(出版社)が主催していた“一風変わった美術学校”で、南さんは都立の工芸高校を卒業後、その美学校へ入学するわけですが、そこで、奥様以外にも、ご自身の人生に大きな影響を与えた多くの方々と出会っていますね。前衛美術家であり、後に芥川賞を受賞した赤瀬川原平さんもその一人ですが、当時はその美学校の先生をされていたとか。

**南** 東京芸大の試験に落ちたとき、たまたま美学校の入学案内のポスターを見て、その奇怪なロゴとイラストに衝撃を受けたんです。ポスターには、赤瀬川原平、井上洋介、山川惣治、木村恒久、中村宏、中西夏之といった先生方がいらっちゃって、講師陣も、澁澤龍彦、埴谷雄高、唐十郎、土方巽といった錚々たるメンバーでした。



本人遺産(文藝春秋/2016年)

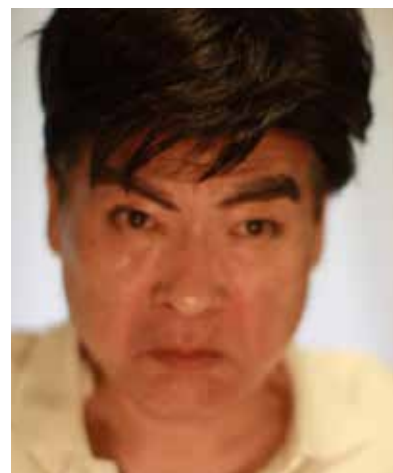
■『本人遺産』より



黒澤明



寺山修司



石原裕次郎

**編** 確かに、凄い顔ぶれですね。

**南** 無試験だったこともあり、もう、さっそく入学を申し込みました。

**編** 赤瀬川原平さんとは、先生・生徒の縁にとどまらずその後も交流が続き、お仕事も一緒にされるようになるわけですね。そして、赤瀬川さんを通じて、南さんの生き方や物の考え方にまで影響を与えた『宮武外骨』に出会うことになります。

**南** そうですね。赤瀬川さんのはじめての講義が宮武外骨についてだったんです。外骨は、明治から昭和にかけて活躍した、出版人、ジャーナリストです。当時はものすごく人気があったんですが、その後埋もれてしまっていたのを赤瀬川さんや、後に筑摩書房で活躍する松田哲夫さんが古本市なんかで、色々発掘してきて、ブームになった。外骨は、『滑稽新聞』や『教育画報ハート』『スコブル』など、今見てもユニークな新聞や雑誌を自ら編集・出版していました。私は「ハート」を見たとき、あっ、自分がやりたかったのはこういうことだったんだなと思いました。

**編** 取り上げるテーマのユニークさもさることながら、文章や独特な挿画、そして紙面のレイアウトなど、それらが総合的に響き合う、独自の世界がありますよね。南さんは、イラストはもちろん、かつて青林堂の編集者時代にはデザイン・レイアウトも手掛けていらっしゃったこともありますし、軽妙洒落な文章も得意としていますが、そうした表現のすべてに、宮武外骨ゆずりの「滑稽を愛する精神」が溢れているような気がします。考えてみれば「滑稽」というのは、ギャグでもお笑いでもない、何とも深い言葉ですね。

**南** ばかばかしい一笑に付されるようなものに、興味があるんですね。世間の人々がまったく無関心でいる日常的なことが面白い。



ねんど夏フェス2014「妖怪フィギュア」



ねこイラストレーション



ゆるキャラ「ふなっしー」

## 義務でなく、面白くやった仕事が 結局いい仕事になる

**編** 赤瀬川さんたちで行なった「路上観察」なども、まさに、日常的なものの中に非日常的な面白さを発見するという行為の一つなのではないでしょうか。南さんは、私たちがよく目にする、ごく普通の貼り紙にもていねいに目を通し、新たな発見を楽しんでいるそうですが、それらを『ハリガミ考現学』という一冊の本にまとめられていますね。

**南** 誰かが何かを伝えたいためにするのが貼り紙なんですけど、だいたい読まれないんですよ。でも、それをあえてよく読んでいくと、書いた人の生活や性格が見えてきて面白い。面白がって見ると、面白くなるんです。

**編** 逆に言えば、つまらない見方をすれば何でもつまらなくなる。どうせなら、面白がって暮らす方が、断然、得ですね。お金もかかりませんし(笑)。年を取るとどうしても、面白がる心の弾力がなくなっていくような気がしますが、南さんは、古希を迎え70歳になったというのに、まるで少年のような好奇心を持って世の中を閲覧になっています。『本人術』の、面白さの原動力ですね。

**南** やりたいと思ったときにやるのが面白いんです。「誰の顔を取り上げるのが今面白いのか？」それを考えるのも面白いですね。今年70歳になる予定ですけど、やりたくなったら即やります。70歳になる大人がやることだろうか？とも思い

ますが(笑)。でも、面白いことって、無理やり見つけようとして、義務感で追いかけたら、面白くなくなっちゃう。むしろ仕事じゃないほうが、のびのびと面白いことができます。作品は、金銭の絡まないところでやったものが、結果として、後々評価され残っていくように思います。残そうと思ってやった仕事は、あんまり面白いものにはなりません。そのときに楽しくやった仕事が、結局いい仕事になると思います。

**編** 赤瀬川さんは「老人力」で一世を風靡しましたが、南さんには、持ち前の「滑稽力」を存分に発揮していただいて、世の中をもっと面白く元気にしていただきたいと思います。本日は、楽しいお話をありがとうございました。



ハリガミ考現学 (全) (ちくま文庫／1990年)

